根　来　寺　坊　院　跡

― 根来公衆便所設置に伴う発掘調査概報 ―

1989. 3

財団法人　和歌山県文化財センター

序

新義真言宗総本山として知られる根来寺は、平安時代末期に高野山を下山した興教大師覚鑁が開いた寺で、最盛期には僧坊堂舎二千数百、山内に止住する者一万人を数えた大規模な寺院であったと伝えられています。

このように繁栄を誇った根来寺も、秀吉の根来攻めにより現存する大塔・大師堂のほか、わずかな建物をのぞき灰塵に帰しました。しかし、江戸時代の中頃には80余の寺院が復興したといわれています。

この度、岩出町が根来寺駐車場の一角に公衆便所を設置することになり、当センターが発掘調査を実施しました。

本書は、その成果をまとめた概要報告書でありますが県民の皆様のみならず、広く研究者の皆様の一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり御指導・御協力をいただいた各位にたいしまして感謝の意を表するものであります。

平成元年３月

財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　仮　谷　志　良

例　　言

1　本書は、岩出町が根来寺駐車場に公衆便所を設置するのに先立ち実施した根来寺坊院跡発掘調査の概要報告書である。

2　発掘調査は、財団法人和歌山県文化財センターが岩出町から委託を受け実施し、辻林　浩と村田　弘が担当した。

3　本書の遺物実測およびトレースには作田淳子・上野道代があたり、遺物の写真撮影は辻林がこれにあたった。

4　本書の本文・遺物実測図・写真図版に付した遺物の番号は一致する。また、遺物の実測図は縮尺を⅓に統一したが、遺物番号20と48は大型品であるため縮尺を⅙にした。なお、縮尺が⅙のものについては個々にスケールを付した。ただし、遺物写真については任意の大きさである。

5　調査および本書の編集・執筆は辻林が担当し、村田が補佐した。

6　調査にあたっては、宗教法人根来寺、岩出町役場、同教育委員会の御配慮を受けた。

目　　次

Ⅰ　調　　査 …… 1

Ⅱ　遺　　構 …… 2

Ⅲ　遺　　物 …… 3

　a　遺構出土の遺物 …… 3

　b　包含層（灰色炭混り土）出土の遺物 …… 4

Ⅳ　ま　と　め …… 4

図・図版　　目　次

第１図　調査地点位置図

第２図　遺構全体図

図１　　遺構出土の遺物

図２　　遺構出土の遺物

図３　　遺構出土の遺物

図４　　包含層出土の遺物

図５　　包含層出土の遺物

図６　　包含層出土の遺物

図版１　遺構全景・細部

図版２　ＳＢ－01出土遺物

図版３　ＳＢ－02出土遺物

図版４　包含層出土遺物

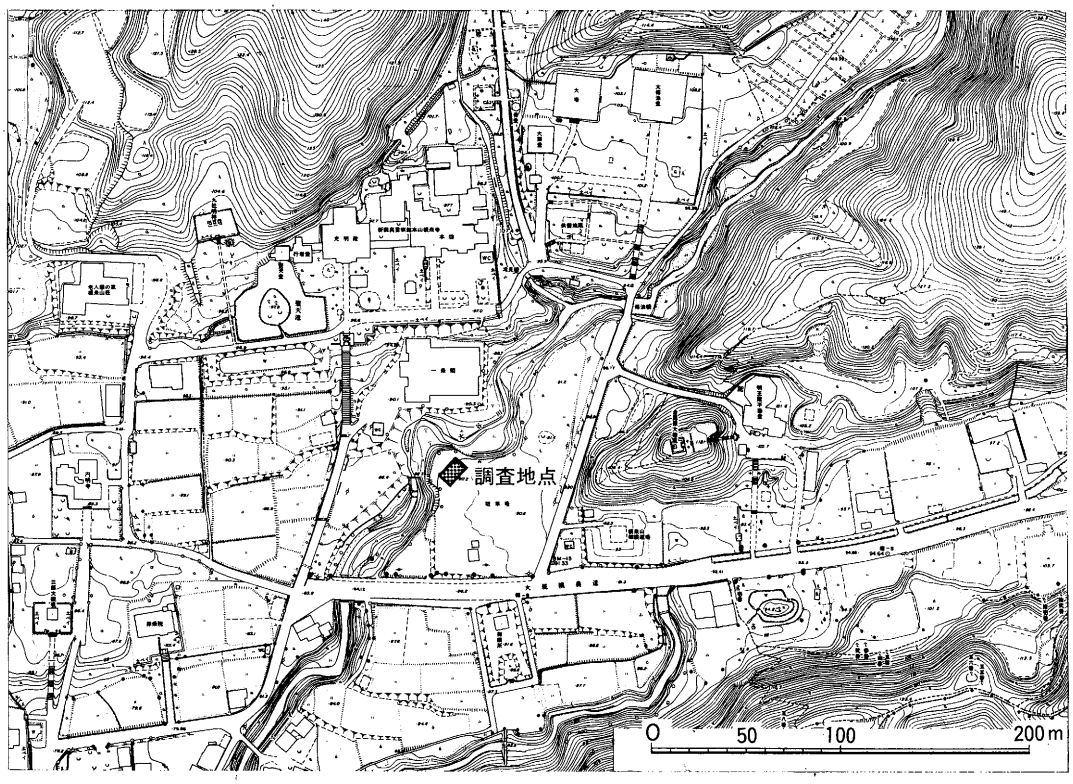
Ⅰ 調　　査

岩出町が根来寺山内に民俗資料館を建設した際、公衆便所を取り払ったため新たにこれを設置する必要が生じ、岩出町と県教育委員会が協議を重ねた結果、工事面積全域にたいし工事深度までの発掘調査を行うこととなり、当センターが岩出町から委託を受け急拠発掘調査を実施した。

調査地点は、根来寺大塔の南 200 m にある駐車場の北西隅にあたり、山内を流れる大谷川が大きくその流路を変換する地点にあたる。本地点の北西約 5 m で大谷川改修工事が行われた際の立会調査では、13世紀代の瓦器を含む包含層が確認されていた。

今次の調査は、面積にして約 100 ㎡で工事深度までという限られた調査であり、遺構としても16世紀代の間で造り替えられたとみられる半地下式倉庫跡を検出したにとどまる。

基本層序は、駐車場造成時の整地土を最上層とし、次に明治時代以降の水田化に伴う旧耕作土と床土が、次に15・16世紀代の遺物を含む灰色土が、次ぎに13～15世紀代の遺物を含む灰色炭混り土となる。検出遺構は、いずれも灰色土の上面で検出した。なお、調査区北壁際の補足調査トレンチで灰色炭混り土の下層に13世紀前半代の瓦器を含む暗茶褐色土を確認したが、この層の上面あるいは下面に遺構面が存在するか否かについては確認できなかった。



第 1 図　調 査 地 点 位 置 図

Ⅱ 遺　　構

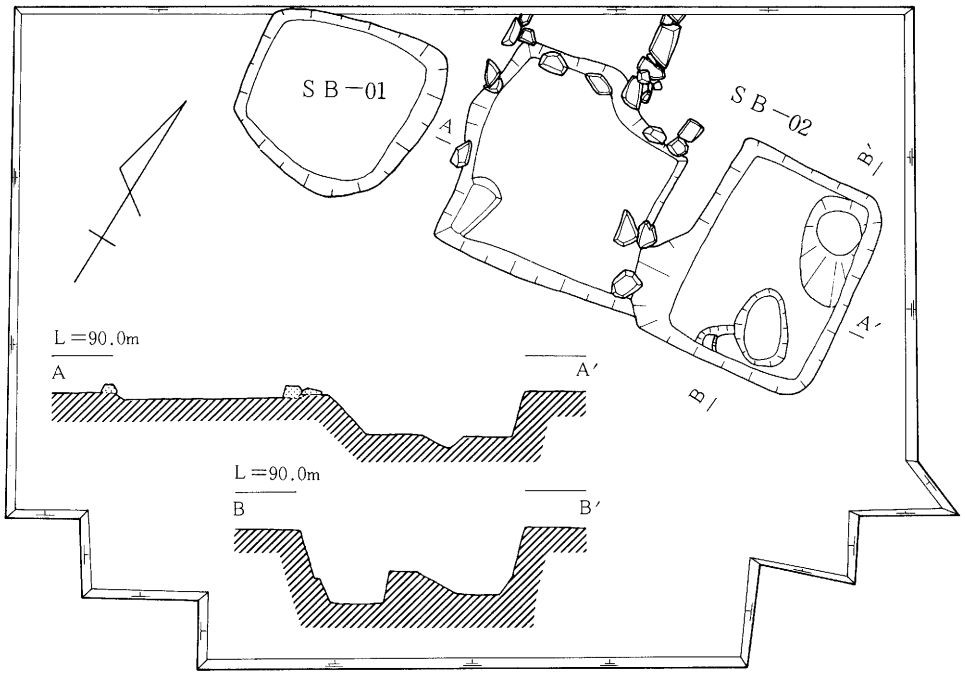
検出した遺構は、半地下式倉庫跡（ＳＢ－01、ＳＢ－02）だけである。

ＳＢ－01　不整形の方計を呈し、四壁は赤く焼け、床面は平坦である。出土遺物が16世紀後半の様相を示すところから、天正の兵火により廃絶した遺構と思われるが、江戸時代の再興時あるいは明治時代以降の水田化に際し削平を受けているものと思われる。

ＳＢ－02　凹状の平面形を呈し、ＳＢ－01同様すべての壁は赤く焼けている。凹状の西室の堀り込みは浅いが、東室の堀り込みは深い。東室の東壁および西壁の一部には拳大の石が積まれており、東室のすべての壁面には粘土が貼られていたようである。なお、東室東壁際には２箇所の甕の据付け用の穴が掘られている。出土遺物から16世紀前半代の遺構と考えられる。

ＳＢ－01、ＳＢ－02とも埋土中から多量の焼けた壁土が出土している。ＳＢ－02には礎石が伴うところから土壁をもつ上屋が想定できるが、ＳＢ－01も同様であったと思われる。

これまでに同種と考えられる遺構10例を検出したが、現在のところ16世紀を逆上る例は検出されていない。今次の例にもみられるように、一部に石積みのみられるものと素堀りのものとがみられるが、遺物からみて相対的に石積みをもつもののほうが古い様相を示すが、地盤にもよるため、構造上の差違と時期差の関連については今後の類例の増加を待ちたい。



第２図　遺構全体図

Ⅲ　遺　　物

調査面積に比して出土した遺物が多量であるため、遺構検出面より上層の近世以降の遺物は割愛した。また、遺物検出面より下層の遺物も代表的なもの以外は省略した。以下、遺構出土の遺物と包含層（灰色炭混り土）出土の遺物について報告する。

a　遺構出土の遺物

ＳＢ－01　（図１・２－１～22）

１は中国製青磁盤で、体部内面に丸彫りの蓮弁文が施されている。釉は高台内におよぶが、輪状に削り取られている。２は中国製青磁碗で、体部外面に線描きの蓮弁文が施されるが、剣頭は蓮弁と一致しない。３～５は口縁端反りの中国製白磁皿である。７～10は中国製染付である。７・８は饅頭心の碗で、９・10は体部外面に牡丹唐草文が、内面見込みには玉取獅子が描かれた皿である。11～18は土師質の皿である。いずれも口縁部が強いナデにより肥厚するタイプのもので、赤橙色を呈する。19・20は備前焼の壺である。19は灰色の木目の荒い胎土で肩部に単位５本の直線文が２条引かれた櫛目文壺である。口縁端は折り返しにより玉縁状にしている。20は肩部から体部にかけて単位４本の直線文を配し、この上方の２帯に波状文を描く櫛目波状文壺で、胎土は密で赤褐色を呈している。肩部に黄褐色の胡麻釉がかかる。口縁部は19と同様折り返しにより玉縁状にしている。21・22は備前焼の辣韮徳利と船徳利である。

ＳＢ－02　（図２・３・４－23～49）

23は中国製青磁盤である。口縁部を「く」字状に外反させ、さらに端部を上方に引き上げたもので、体部内面に丸彫りによる蓮弁文が施されている。釉は高台内におよぶが、輪状に削り取られている。24～35は中国製白磁皿である。24～26は荒い貫入のはいった口縁が端反りする皿で、青白色の釉が厚くかかり、外面体部下端に釉溜りがみられる。高台断面は厚く台形を呈する。なお、畳付から内側は露胎となっている。27～35も端反りの皿であるが、高台は断面三角形を呈し、貼り付け高台である。36～44は中国製染付皿である。36～41は口縁が内弯する碁笥底の皿で、36～40は口縁部に波濤文帯を巡らし体部下半に蕉葉文を描き、内面見込みには草花文が描かれる。41は体部外面と内面見込みに凡字文が描かれている。42～44は口縁が端反りする皿である。42は内面見込みに玉取獅子が描かれる。43は体部外面に牡丹唐草文が内面見込みに玉取獅子が描かれる。44は体部外面に牡丹唐草文を内面見込みに羯磨文が描かれる。45は灰色の密な胎土の美濃瀬戸系天目茶碗である。46は体部下半が欠失しているが三足の付く美濃瀬戸系香炉で、外面は肩部まで、内面は口縁端部にのみ鉄釉がかかるが他は露胎である。47は美濃瀬戸系灰釉の皿で、体部外面に成形時の強い段が残る。釉は高台内側までかかるが、高台内は露胎となっている。48は信楽焼の壺である。49は土師質の小皿で、外底に網代の圧痕が残る。

b　包含層（灰色炭混り土）出土の遺物　（図４～６－50～103）

50～52は中国製青磁碗で、50・51は体部外面に片切彫りによる蓮弁文が施されている。51はオリーブ色の釉が厚くかかり、蓮弁は短く体部上半で終っている。52は草緑色の釉を高台内まで施釉したのち、輪状に削り取っている。53は中国製白磁杯で、乳白色の釉が施されている。外面体部下半は露胎で削り痕が残る。54～85は土師質皿である。54は口縁部が大きく外半する大皿で、体部外面には指頭圧痕が顕著に残る。55～60は白土器の中皿で、胎土はよく水簸され、口縁部に強いナデを施す。61は黄白色を呈する土師質の中皿で、口縁部は強いナデにより外半する。62～65は赤土器の中皿で、口縁部が内弯ぎみに丸くおさめられている。66～76は小皿で、このうち66・68・69・71は白土器である。いずれも口縁部のナデが強い。67・70・72は赤橙色を呈する小皿である。67・70は口縁部が強いナデにより外半する赤土器小皿に酷似するが、口縁は肥厚しない。72は底部から口縁が内弯ぎみに立上る。77～85は土師質ヘソ皿で、白土器（77～81）、赤土器（82～85）に分けられるが、うち83～85は黄白色を呈する。86は白土器の高台付皿で、高台内には貼り付け痕が顕著に残る。87・88は土師質土釜で、鍔の位置は高い。いずれも内折れした口縁の端部を上方に丸くつまみ上げている。89～92は瓦器の椀で、器表が黒色を呈するもの（90・91）と灰色（89）を呈するもの、内面の磨きの密なもの（89・19）と粗なもの（90）とがある。93は瓦器小皿である。94・95は美濃瀬戸系の灰釉の皿で、94は内面見込みに印花菊文が施されている。95は外底に輪陶枕の痕が残る。96は美濃瀬戸系のおろし皿で、体部外面中位までと内面口縁部直下まで施釉されている。97は備前焼すり鉢で、口縁端部が上下にやや拡張されている。98～103はこね鉢で、98～100は東播系の須恵質、101～103は瓦質である。

Ⅳ　ま　と　め

半地下式倉庫と考えられる遺構は、平面形あるいは規模の差違はあるが、これまでに10例を検出している。現在のところ15世紀に逆上るものは認められず、16世紀代に限定されるが、16世紀前半と16世紀後半に大別できる。いずれの例も壁面が赤く焼けているのは、防湿のために壁面を焼いたものと考えられる。床面には甕あるいは壺の据付の用の穴が掘られることが多いが、掘られていない例もある。また、10例中２例については、棚を設置したと思われる礎石が検出されており、このうち１例には井戸や溜桝などの施設が伴っている。

このように少ない例でしかも形態が多様であるため、その機能については速断できないが、現在のところ物置的な性格が強く、場合によっては台所の一部（竈を除く）の機能おも併せもったより日常的な施設ではないかと考えている。本書では半地下式倉庫という名称を使用したが、将来的にはより妥当な名称を用いる必要があろう。

SB－01

図 1

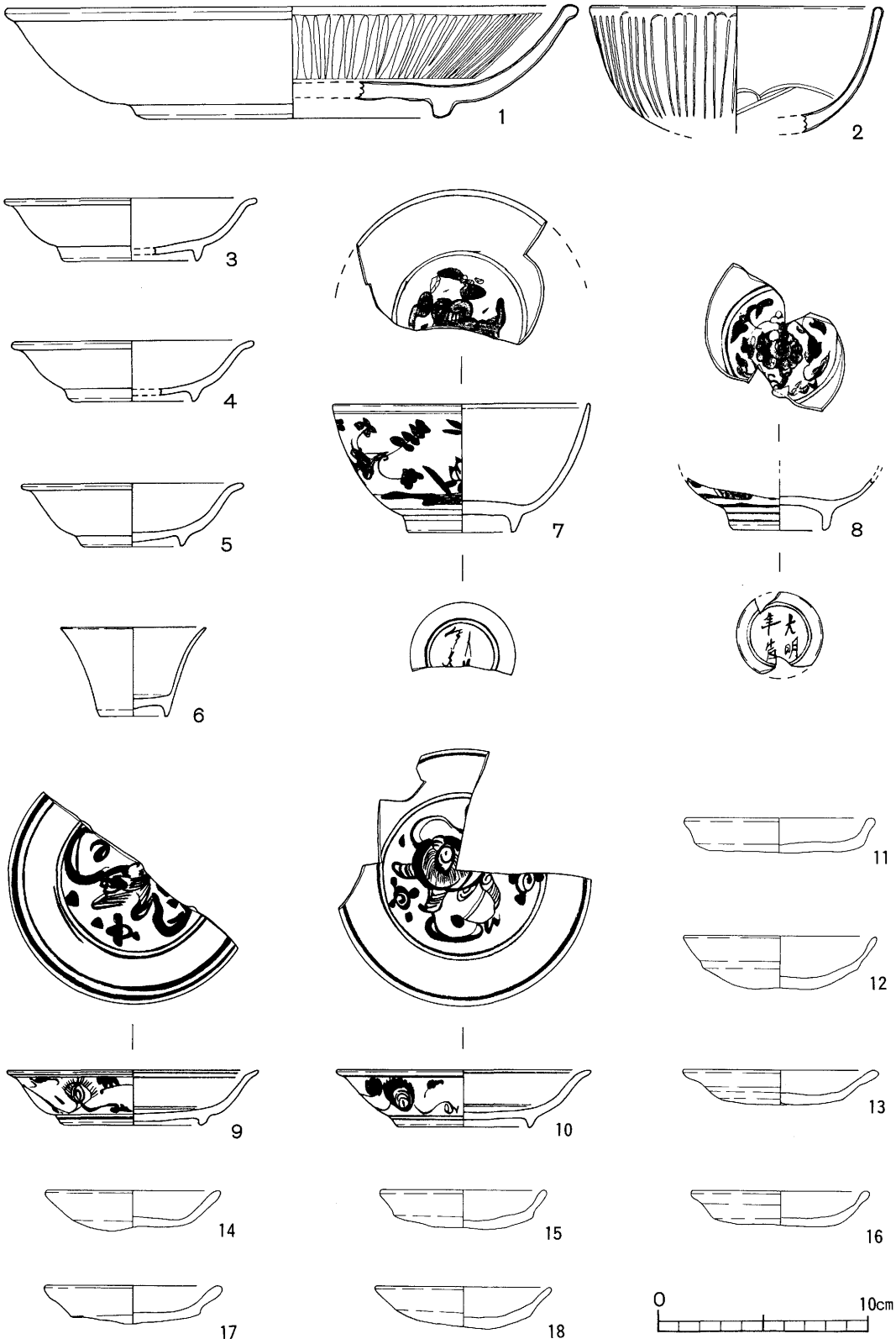


図 2

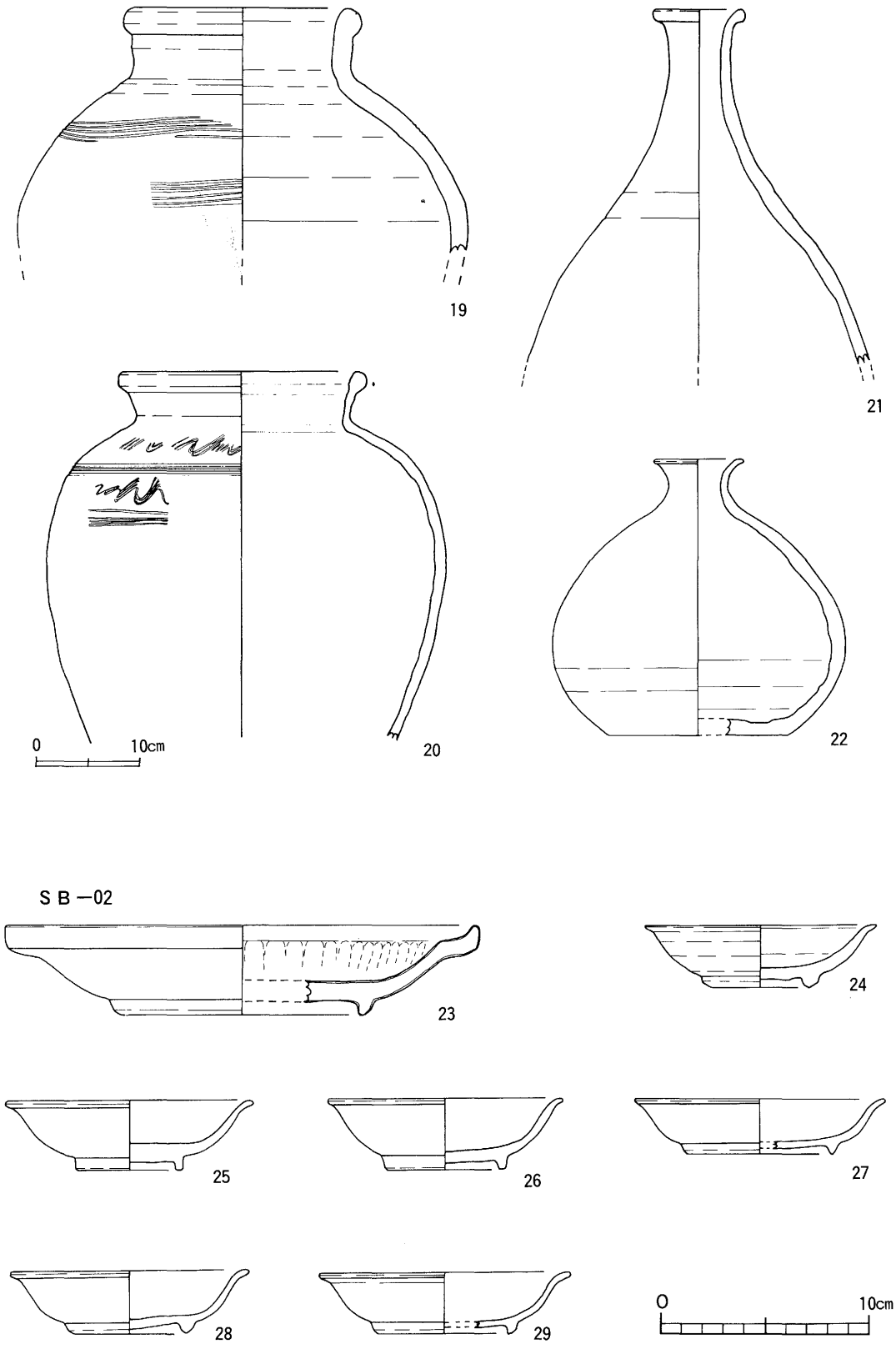
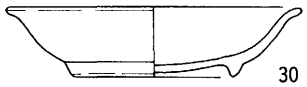
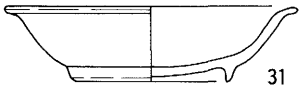
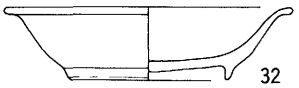
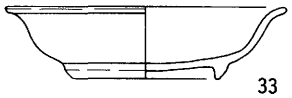


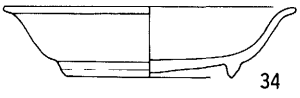
図 3

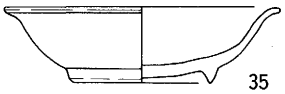

30

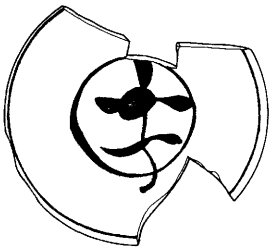

31


32

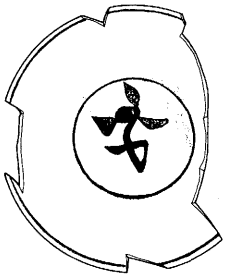

33

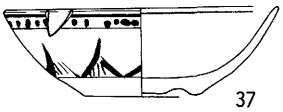

34

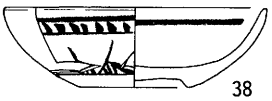

35

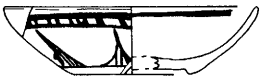


36

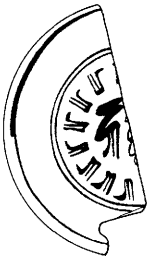


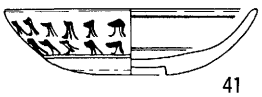

37


38

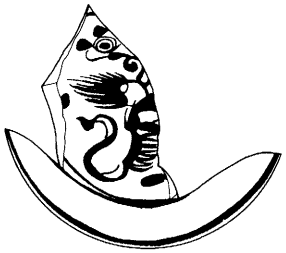

39

40

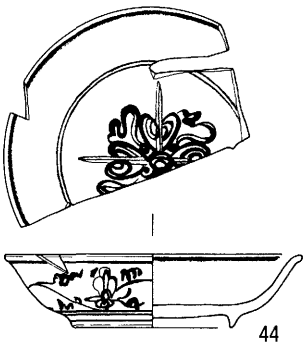



41

42



43



44

0 10cm

図 4

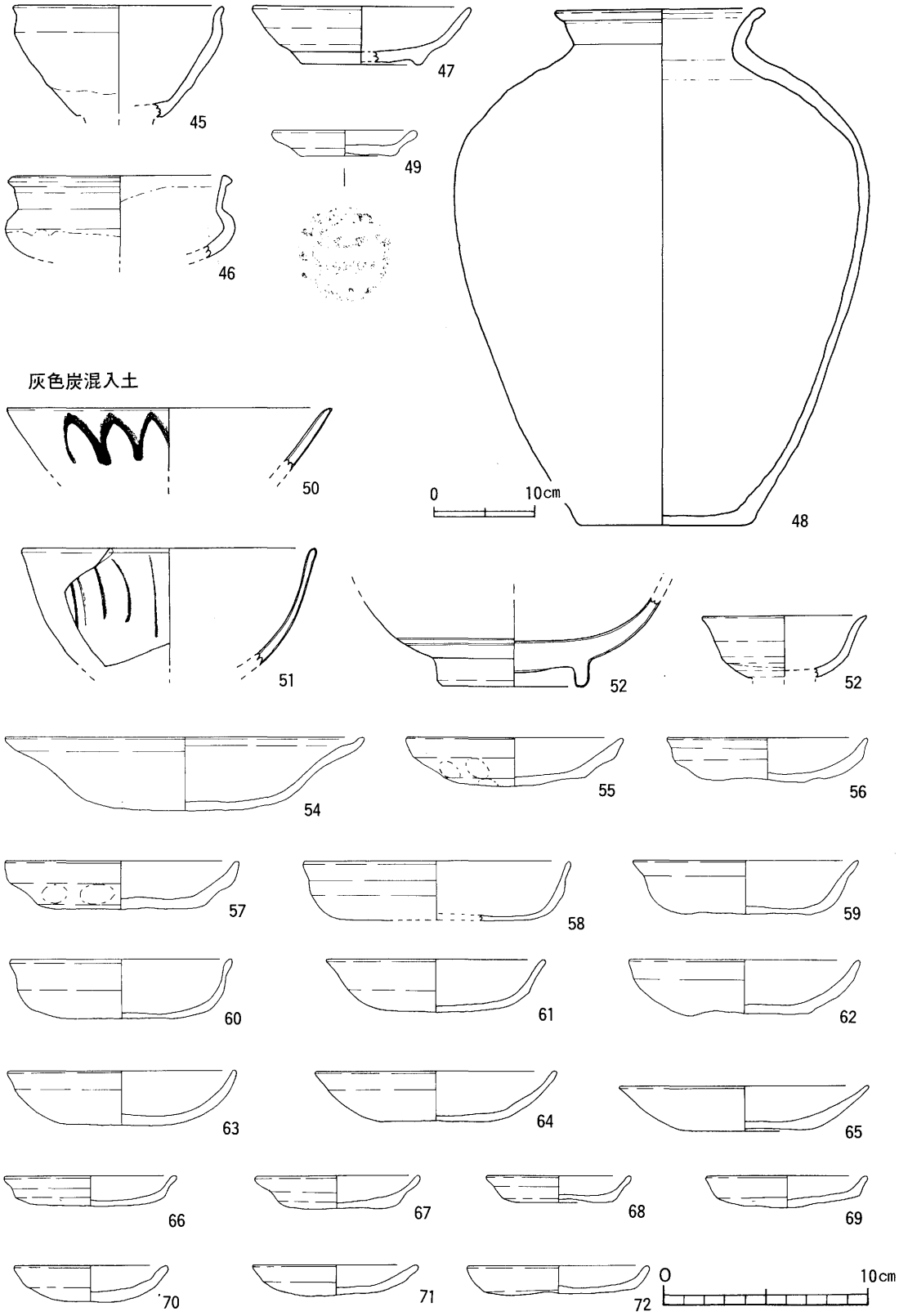

45
46
47
49
48
0
10cm
灰色炭混入土
50
51
52
52
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
0
10cm

図 5

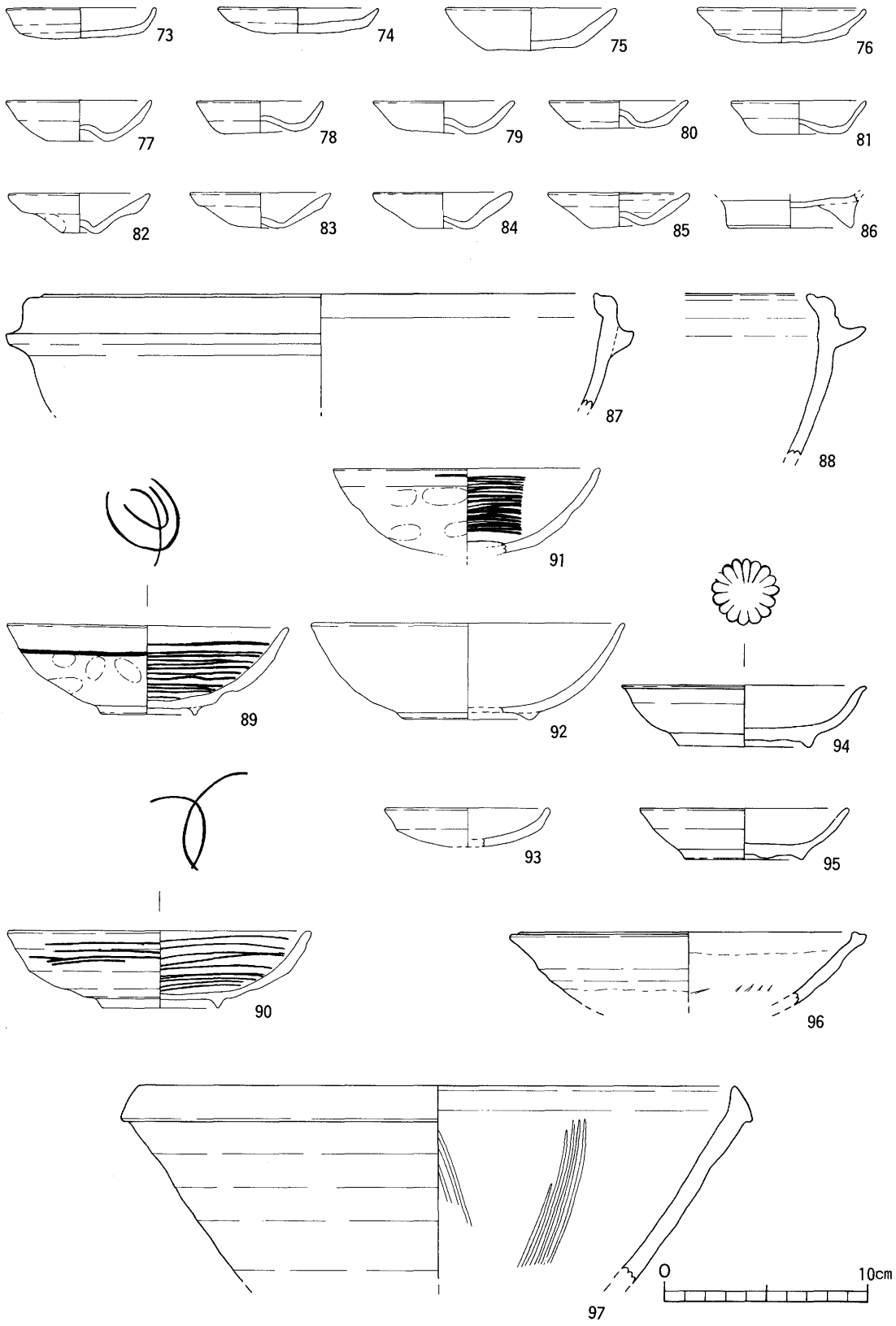
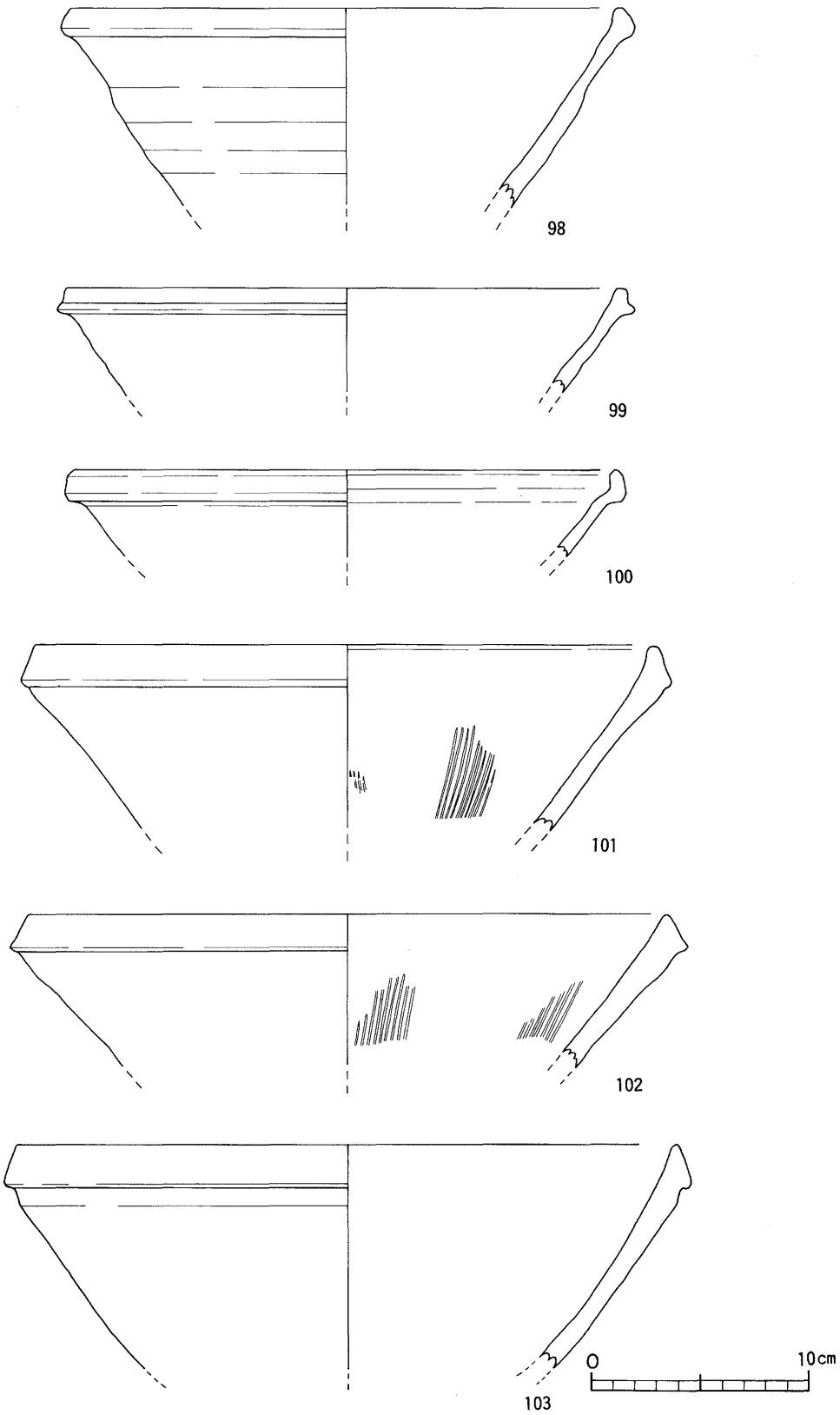

73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
0
10cm

図 6



1．調 査 区 全 景（南から）

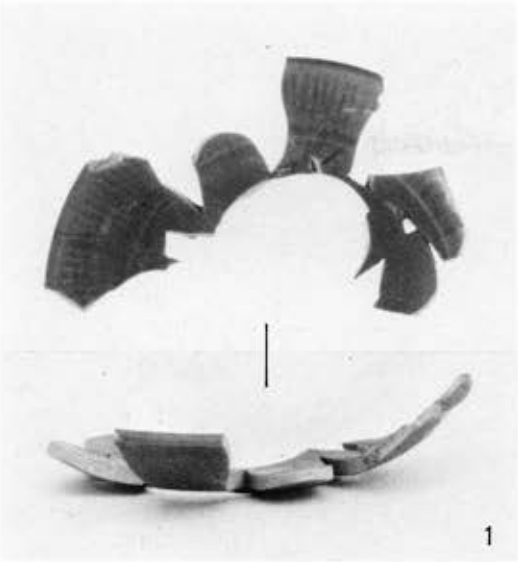
2．SB－02　西室（南から）

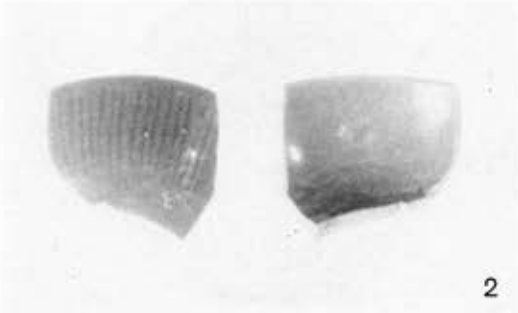
3．SB－02　東室（南から）

4．SB－02　東室西壁石積

5．SB－02　東室東壁石積

図版二

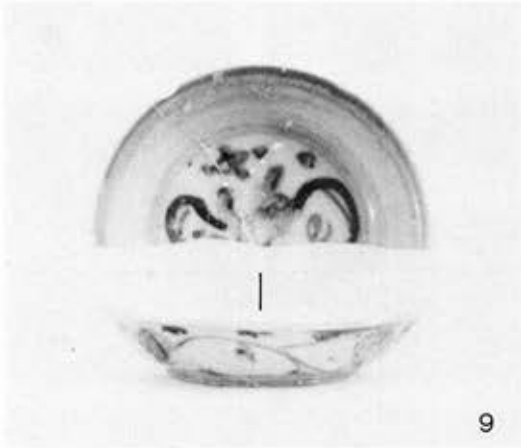

1

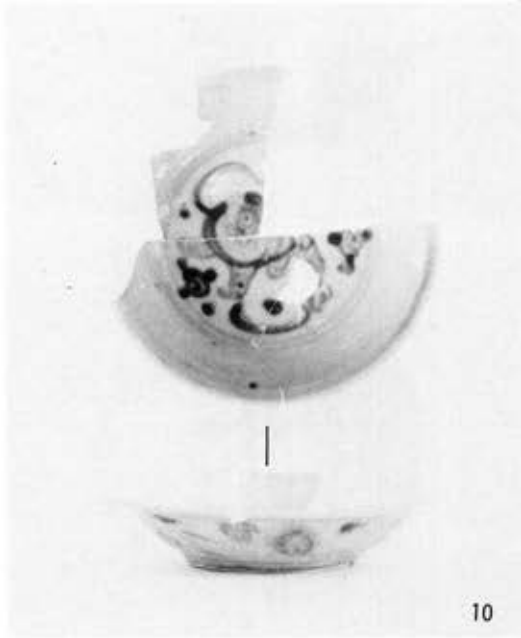

2

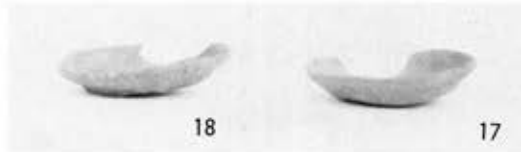
3

6

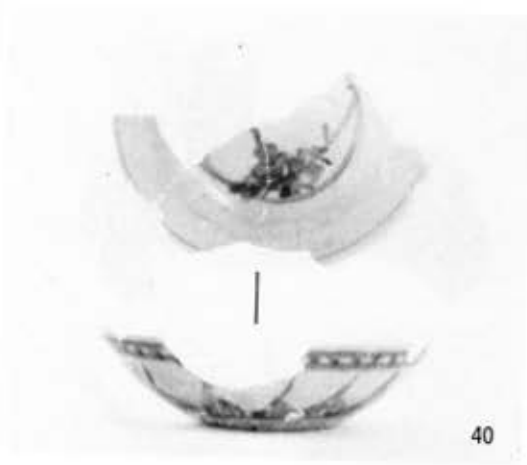
7


9

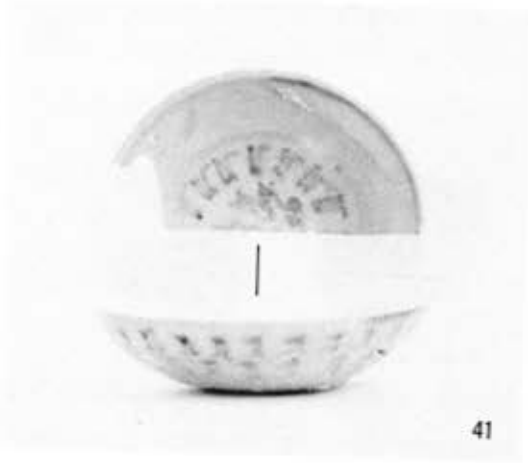

10


18 17

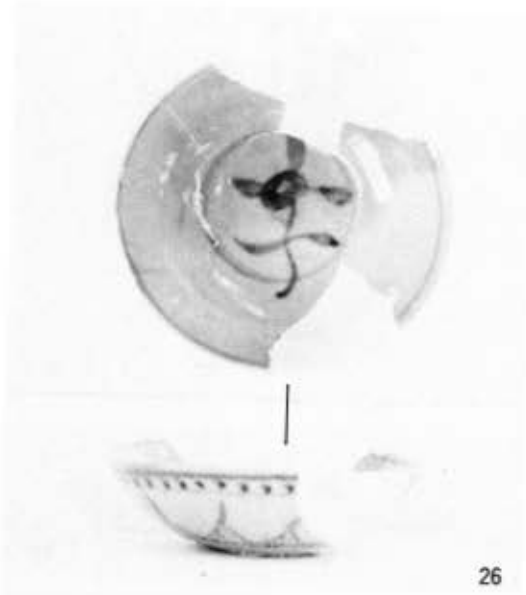
19

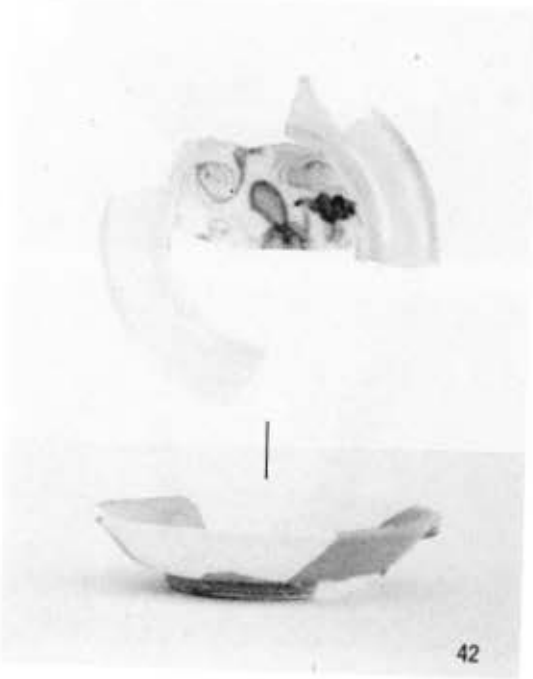

40

24

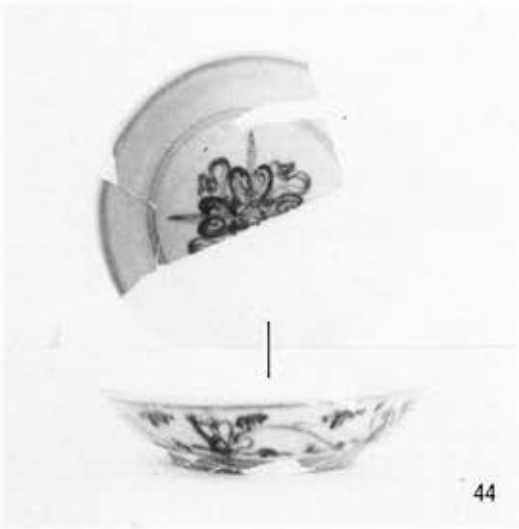

41

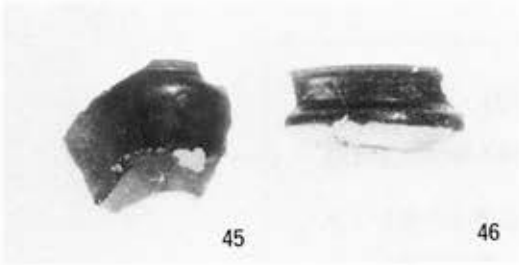
25


26


42

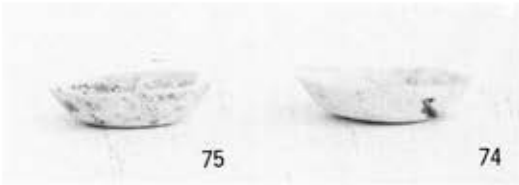
43

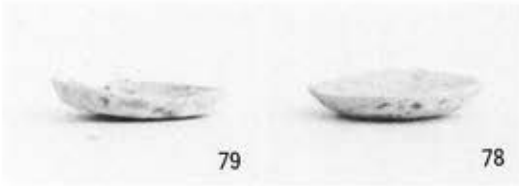

44


45 46

63

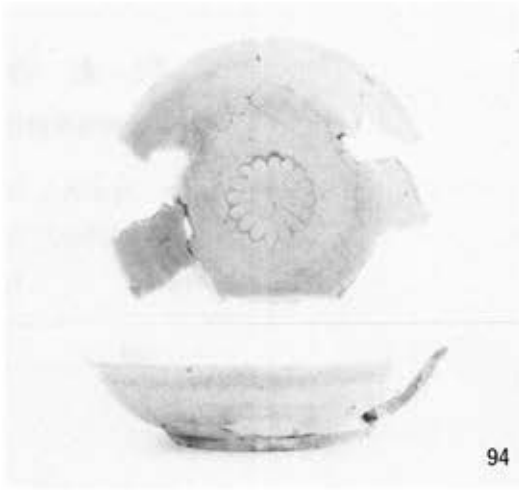
72 67


75 74


79 78

82 85

89


94

根 来 寺 坊 院 跡

— 根来公衆便所設置に伴う発掘調査概報 —

編集　財団法人 和歌山県文化財センター

発行　財団法人 和歌山県文化財センター

印刷　　邦　上　印　刷